



北川 寛介

『豊国神社の鉄燈籠』

2015年10月、方広寺の梵鐘見学を終え、隣にある豊国神社の鳥居をくぐり神社の脇にある真っ白な宝物殿に入りました。正面の3m近い鉄燈籠が目に飛び込んできました。明るい屋外から室内に入った私には赤黒く異様な色に感じました。灯明を入れる火袋には菱形のカミナリのような文様があり、上部に三日月や鳥の図が切り込まれています。竿の上帯に鋳出された銘によって、秀吉の三回忌にあたる慶長 5年 8月18日（1600年）に奉納されたもので、三条釜座の鋳物師で「天下一」の称号を持つ辻与次郎が作ったものであることが判ります。

前にも与次郎の作品を見た記憶があります。それはちょうど10年前、学生時代の友人達数名で京都の大原を観光した時、京都市民の彼が案内役を引き受け高台寺・三千院と寂光院を散策しました。寂光院は不審火で2000年に焼失、2005年に再建された真新しいお堂を出て、古びた桐の紋を透かした立派な鉄製の雪見灯籠を見つけ『何か由来がありそうだ』、そう思った私は事務所に入り、係の女性に尋ねました。宝物殿の所蔵品リストを出して彼女は『与次郎作、南蛮鉄を使う』と書かれています、と教えて頂きました。やはり由緒のある品だったのです。もとは伏見城（1592年）にあったものですが、いつ誰が寂光院に持って来たかは不明、南蛮鉄で作られたとの記事に興味を沸きました。他にも南蛮鉄で作られた燈籠があります。日光東照宮の陽明門に登る石段の右脇にある一対の鉄灯籠です。伊達政宗がポルトガルから鉄を運んで鋳造したもので、元和 3年 5月（1617年）の銘が入っています。

辻与次郎（つじ よじろう）は、安土桃山時代から江戸時代初期の釜師、鋳物師。滋賀県に生まれ、後に京都の三条釜座に住む。千利休の釜師となり、室町時代に盛行した芦屋釜・天命釜とは異なる利休の好みの丸釜・阿弥陀堂釜など、新しい形・文様や従来にない肌合の釜を創始しました。当代随一の釜師として天下一の称号を名乗ることを豊臣秀吉から許されました。豊国神社の「燈籠」は秀吉死後、その恩に報いる為與次郎が寄進したものと伝えられています。出羽西善寺の「梵鐘」には「山城愛宕郡三條釜座鋳物師天下一辻與次郎藤原實久」と記されているそうです。

芥田 博司様から方広寺梵鐘の鋳造に関わる文書資料を頂きました。片桐且元書状（慶長19年3月）、大仏参鋳物師覚（慶長19年3月）、大仏鋳鐘ニ罷上鋳物師人数之事（慶長19年4月）、など芥田文書が記載されたものです。（千姫 姫路文学館 2011年）次の機会にご紹介したいと考えています。



豊国神社



鉄燈籠



寂光院の雪見燈籠

「鉄のふしぎ博物館」

見学に来た子ども達

来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感



むらの鍛冶屋



ホームページと電子メールをご利用ください。
<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>
ryou@memenet.or.jp